

れんぎ
認定特定非営利活動法人 日本雲南聯誼協会

【東京本部】〒162-0846 東京都新宿区市谷左内町 21-13 1 階
Tel:03-5206-5260 Fax:03-5206-5261
Email:yunnan@jyfa.org URL: http://www.jyfa.org/
【雲南支部】中国雲南省昆明市人民東路 289 号集大広場 2011 室
Tel.+86-871-3311468 Fax.+86-871-3320658

<http://www.facebook.com/NPO.JYFA> @jyfa
ブログ [雲南の郵便屋さん] 検索

編集・発行人 初鹿野 恵蘭
印刷協力 昭和情報プロセス(株) (株)技術評論社 / デザイン Hope Company



Japan Yunnan
Friendship Association

彩雲の南

第43号

発行日 2012年(平成24年)11月15日

会報

愛を伝えて 協会の願いはつきず

初めての支援校児童劇巡回公演事業を終えて



協会設立から12年目の今年、雲南の支援小学校に対する新しい「フォローアップ事業」が誕生しました。

協会はこれまでに22の小学校を建設し、多くの子どもたちの学習環境を改善してきましたが、それで満足すべきではありません。教育とはさまざまな形で子供の成長を促すことです。代わり映えのしない景色に囲まれて暮らす山奥の子供たちに「豊かな心」を育んでほしい、外の世界を知ってほしい—そんな思いが、今回の事業のきっかけとなりました。

2012年9月初旬、協会や雲南の現地協力者を含む30名余りのメンバーが昆明市、楚雄州、シャングリラ、そして麗江の協会支援校5校で児童劇の公演を行いました。わずか8日間の行程は、感動に満ちたものでした。最初の公演場所・老村小学校では、到着するやいなや、歓声とともに子どもたちに取り囲まれました。よそから来た人を見上げる黒く小さな顔、好奇心に輝く目と素朴な微笑み。子どもたちの多くは俳優の話す標準語を完全には分からなかったのですが、それでも公演のチラシを振り回し、夢中になって大声で“がんばれ！”と声援するのを

認定NPO法人日本雲南聯誼協会
理事長 初鹿野 恵蘭

見た時、全ての苦労が報われたと感じました。

どの公演にも多くの村人がやって来てくれました。中にはお孫さんを背負い、険しい山道を越えてきたおじいさんおばあさんの姿も。公演後、「面白かった？」との問い合わせに、「面白かった！」と孫の小さな手を握りしめて答えるお年寄り…。純朴な山里の人々がどうしても子どもたちに公演を見せたかったのだと知り、あらためて確信しました。子どもは人類の未来であり、世界の財産であり、子どもを慈しみ育てるのは私たち大人の責任です。街の子どもにとってはありふれた公演も、山奥で育った子どもたちにとっては一生に一度あるかないかの貴重な機会であり、夢を抱くきっかけなのです。

今回の旅は別の喜びにも溢れていました。立命館アジア太平洋大学の6人の学生ボランティアが「本当に参加してよかった！」と言ってくれました。彼らはこんな山中を訪れたことはなく不安そうでしたが、子供たちの笑顔がすべての不安を吹き飛ばしてくれました。また、支援校の子どもたちに、誰が校舎を作ってくれたのか知っていますかと聞いた時、われ先に「日本人の人！」と言ってくれたこと。そして、1人の母親としての喜びもありました。1人息子がボランティアとして事業に参加してくれたのです。幼い頃私に連れられ度々となく雲南を訪れていた息子も今や大学生。今回は実に12年ぶりの再訪となりました。「母さん、僕はやっと“雲南”が、そして母さんがわかつた気がする。来てよかった。また来るよ」、そう言ってくれました。



12年といえば、ちょうどひと回り。協会の成長を見守つてきたこの年月は、今日まで共に活動してきた支援者の皆さんのお顔に刻印を残し、何も知らなかつた子どもを大人に成長させました。人は老いていますが、人と人の愛情や信頼は根はおり、芽吹いて、協会の精神を次の世代に伝えていくことでしょう。それこそが、私や会員の皆さんのがいくつの困難を乗り越え、活動を続けている原動力なのかもしれません。

児童劇公演事業に参加して

立命館アジア太平洋大学「笑 -xiao」代表 庄司智哉さん

緊迫した雰囲気が東アジアに流れている中で、日中韓の人々が互いに協力し、ひとつの作り上げることができ、非常に感動しました。国と国との間には色々な問題も起ますが、今回出会った子どもたちが大人になる頃には平和な世の中が訪れているように、草の根レベルの国際交流をこれからも続けていきたいと思いました。この度は貴重な機会を頂き、どうもありがとうございました。



日韓7名の大学生
ボランティアが参
加してくれました。
(前列左から2番
目が庄司さん)

24校目 支援候補! ワ族の子どもたちが待つ 臨滄市布京小学校を視察

初鹿野恵蘭理事長率いる協会視察団が8月12日、「50の小学校プロジェクト」支援候補校視察のため、雲南省臨滄市を訪れました。視察したのは同市双江ラフ族ワ族ブーラン族タイ族自治県沙河郷にある布京小学校で、同校の視察は今回で2度目です。

双江県はメコン川と小黒江が合流する地域で、県の中心地である勐勐鎮は昆明から755キロ、臨滄市から104キロの位置にあります。県(面積2,165平方キロ)の9割以上は山岳地です。

臨滄市内から布京小学校へは車で約2時間ですが、そのうち40分は険しい山道を通らなければなりません。双江自治県教育局と沙河郷人民政府は昨年、1956年の同小創立以来使ってきた校舎を建て替えました。しかし、地域の学齡児童数は増えたとみられ、教室は足りていません。また、建て替えられなかった食堂や宿舎が使えなくなったため、多くの児童がやむを得ず施設の整った遠方の全寮制小学校で勉強しています。敷地内にある粗末なトイレは不衛生で、電灯もついていません。

学区の子どもたちが布京小学校に通うためには、校舎もう一棟と宿舎、トイレ、食堂の建設が必要で、建築予算は280万元(約3500万円)になります。立地の不便さから運搬費用がかさむうえ、校舎建て替え費用の返済も終わっていないのが現状です。資金調



達の目次はついてお
らず、地元の人々が
協会に寄せる期待は
高まっています。

布京村のワ族の子
どもたちに、勉強に集中出来る安全な環境を提供するのは協会の
願いでもあります。特に、「100万回の手洗いプロジェクト」で少
数民族地域の環境衛生概念の改善を目指してきた協会としては、衛
生的な宿舎やトイレの建設を支援することは大変意義があると考え
ています。



「50の小学校 プロジェクト」とは?

雲南の山岳部では、日本では想像もつかないような劣悪な環境で子どもたちが勉強しています。子どもの学習環境を整え、地域政府・地元住民の教育への理解を深めることで雲南の少数民族を支援しようというのが「50の小学校プロジェクト」です。雲南省に住む25の少数民族に2校ずつ、計50校の小学校建設を目指しています。協会が支援するのは建設費用の1/2~1/3で、残りは地元政府が負担します。また、地域住民は建設作業を通じてプロジェクトに参加します。共に建設を行うことで、支援される側の依存や精神的な従属を防ぐだけでなく、深く地元に根ざし、長く地元に愛される小学校が生まれるのであります。2012年までに22校が完成、23校目もまもなく開校する予定です。支援小学校で学んだ子どもは、合計1万人を超ました。



小さな交流の輪、どんどん広がっています！

小さな壁新聞プロジェクトチームより

日雲の子どもたちが壁新聞を通して交流する「小さな壁新聞プロジェクト」。協会は今年4月と9月、日本の小学校3校の子どもたちが作った壁新聞を雲南省の小学校6校に届けました。そして10月11日には多摩市立多摩第二小学校を訪ね、佐島規（さしま・ただし）校長先生に「小



出展のお父さんが新聞を読みます
（老村小学校）



多摩第二小学校訪問（敬称略・順不同）
初鹿野惠蘭理事長、後藤信行前校長（現多摩市教育委員会）、中村有里子理事、大薗修平理事、平田栄一



藤豊小学校に壁新聞を届けた
雲南省出身のボランティア・依萍さん（左）

多摩第二小学校での懇親会の様子



「小さな壁新聞」の
情報はこちらから
ご覧いただけます。

www.jyfa.org/2_education/edu_9.html

今年もたくさんの出会いがありました！ グローバルフェスタ JAPAN2012 出展報告

お馴染み日本最大の国際協力イベント「グローバルフェスタ」が10月6日、7日の2日間、日比谷公園で開催されました。協会の出展は今回で9回目。2日間の来場者はのべ10万人となりました。

今年はFacebookでの広報の成果か、いつも以上にたくさんの方がブースを訪ねてくださいました。会員の川口邦夫さん、勝尾修さん、七田怜さんをはじめ、石川昭子さん、よしだれいさん、松下純さん、金澤孝さん、城戸弘人さん、差し入れをお届けくださった小崎昭男さん、その他お名前を伺えなかつたたくさんの皆さんに、心からお礼申し上げます。グローバルフェスタでの出会いがきっかけで、活動の輪はますます広がりそうです。

2日間であつた募金はなんと45,796円。募金してくださった方、ブースにお立ち寄りくださった方、そしてボランティアの皆さん、本当にありがとうございました！



たまたま受け取ったパンフレットがきっかけで協会の会員になって早4年。入会したての頃は届いた会報を読みぱりりで「遠い場所の大変な状況で暮らしている人たちのお手伝いをさせてもらっているんだな」と漠然と感じていました。グローバルフェスタのお手伝いは3年前からですが、最初は聞ききじた知識を来場者の方に伝えていただきました。

その後、「25の小さな夢基金」の支援も始め、2年連続で雲南に行きました。支援している高校生に会い、生徒の故郷の村を訪ねたり、通訳ボランティアの大学生と知り合つたりしたことで、雲南省がより身近な存在になりました。特に生徒の故郷の景色や村人たちとの触れ合いは新鮮で、暮らしは大変でも笑顔を絶やさずにいる人たちの強さを感じました。

こうしたイベントでは、協会が長年培ってきた雲南省との関係を自分の体験も交えて伝

活動への思い

会員／ボランティア 久継智弘さん



共に監修で購入した衣装をまとめて、右側が久継さん

「日本と雲南省少数民族友好の夕べ」 第12回チャリティー忘年会に遊びにいらっしゃいませんか？

またたく間に1年がすぎ、今ももうすぐチャリティー忘年会の季節がやってきます。普段なかなか会うことのできない会員同士、雲南好き同士の交流をお楽しみください。勿論会員でない方のご参加も大歓迎！ 今年も少数民族の踊りと一緒に踊りましょう。

日 時： 2012年12月22日(土) 17時～19時
場 所： ピヤステーション恵比寿
(JR恵比寿駅東口より徒歩5分)

会 費： 一般6,500円(学生5,500円) チャリティー込
定 員： 100名 ※先着順

お申込み、お問い合わせは事務局

03-5206-5260



子どもたちの目に映る 「本当の雲南」

第3回小さなカメラマン展開催報告

少数民族の子どもたちの目に映る「本当の雲南」を日本の皆さんにご覧頂きたい—そんな思いから生まれた「小さなカメラマン」プロジェクト。子どもたちの作品を紹介する第3回写真展が、10月31日から11月5日まで町田市フォトサロンで開かれました。

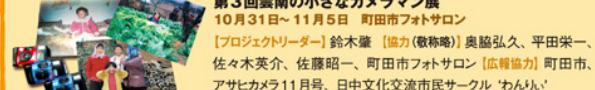
雲南での12年に及ぶ教育支援活動で出会った素朴で純粋な子どもたち。協会が支援した22の小学校の子どもたちに使い切りカメラを渡し、撮ってもらった写真はこれまでに数千枚にのぼります。今回、会員の奥脇弘久さんのご協力で三度目の写真展が実現しました。

たった6日間の開催でしたが、のべ来客者数はなんと1133人！会場に置いた感想ノートにもたくさんのメッセージを残してくださいました。「子どもたちの輝く笑顔に元気をもらった」「懐かしい風景」「幸せについて考えさせられた」初めてカメラを持った子どもたちの写真は、お世辞にも上手とはいえません。しかし、子どもならではの柔軟な感性で切り取った「ありのままの日々」は、過去二回の写真展同様、多くの人に新鮮な驚きと感動をもたらしたようです。

第3回雲南の小さなカメラマン展

10月31日～11月5日 町田市フォトサロン

【プロジェクトリーダー】鈴木肇【協力（敬称略）】奥脇弘久、平田栄一、佐々木英介、佐藤昭一、町田市フォトサロン【広報協力】町田市、アサヒカメラ11月号、日中文化交流市民サークル「わんぱく」



「日本の踊りがつなぐ」 魂の文化交流実現へ向けて、 現地視察！

チャリティー忘年会でもおなじみの「ブランニューダンスマーケット」代表・能見広伸さんと、その師匠で、日本を代表する舞踊家・寒水泰江さんのお2人が率いるダンス集団「寒水・能見ダンストゥループ」。雲南省昆明市と臨滄市で行う交流公演までいよいよ3ヶ月と迫った8月初旬、初鹿野理事長の案内で、現地視察が行われました。視察に訪れたのは、寒水先生、能見さん、そして柴崎美保さんの人。8月8日～12日、出国から帰国までわずか5日間というタイトな日程で、昆明と臨滄を駆け抜けました。



▲昆明市の会場となる雲南大学では舞台装置やステージを入念にチェック

▲臨滄市では、コラボレーションを予定している民衆歌舞団によるデモンストレーションを見学



「美味しい」文化交流!

雲南省昆明市のお隣・玉溪市で8月3日、「第2回雲南・日本蕎麦交流会」が開催されました。両国で食べられている「蕎麦」を通じて交流を深めようというこの企画、2009年3月昆明での交流会に続く2度目の開催です。

今回は日本から、雲南食文化研究会の平林知人会長率いる5名と寺内明子大宮支部長ら協会会員3名が雲南入り。蕎麦打ち名人でもある平林会長が、参加者約50人を前に蕎麦打ちを実演。雲南では滅多にお目にかかれないと日本伝統の技に、参加者から驚嘆の声が上がりました。一方、雲南側は地元の伝統料理「蕎麦餅」作りを披露。最後はできたての美味しい料理に全員で舌鼓を打ち、食文化を通じて日雲の絆を深めた1日になりました。

「第2回雲南・日本蕎麦交流会」

2012年8月3日
於 中玉ホテル(雲南省玉溪市)
主催: 雲南食文化研究会、
日本雲南聯誼協会
協賛: 玉溪市海外聯誼会、
玉溪市政治協商會議

当日はTV局の取材もあり、大盛況。
皆さんありがとうございました!

日本と雲南

若者たちに広がる活動の輪!

上海日本人学校の安保尚子校長と教師7名が8月16日、協会「25の小さな夢基金」事業で支援する昆明女子高校春蕾クラスを訪問しました。

訪問は会員の三木秀隆さんの提案で、将来的な提携も視野に、お互いの学校の状況を理解するのが目的です。上海日本人学校は従来の小・中学課程に加え、昨年4月に高等部を設立。現在101名の高校生が勉強しています。今回の訪問では、教師の交換派遣や上海での短期交流などのアイデアが提案されたほか、日本人教師が春蕾3年生の教室で現地の生徒と交流しました。上海で学ぶ日本人高校生と昆明の少数民族の高校生による学校ぐるみの交流が実現すれば、双方にとって大きな刺激となるに違いありません。



「夢基金」春蕾クラスで少数民族女子高生と交流。(写真左:上海日本人学校・安保尚子校長)

9月17日には、開発経済学を学ぶ大阪市立大学・森脇ゼミの学生17名が協会雲南支部昆明事務局にいらっしゃいました。雲南の少数民族の実態について調査するのが目的で、学生からは「NPOやNGOの活動に協力するにはどんな方法がありますか?」といふ嬉しい質問も。志と意欲溢れる学生の受け皿として、協会が学生組織と提携すれば活動の幅を広げられるのでは、と大いに考えさせられました。

[協力(敬称略)] 三木秀隆、高明



大阪市立大・森脇ゼミの皆さん。
雲南支部職員の話に、真剣に耳を傾けます

出会いと絆 40年目の宴

中国17大学の校友会が協力

東京都市内のホテルで10月31日、「日中国交回復40周年記念パーティー」が開かれました。主催したのは「北京大学日本校友会」。日本で活躍する北京大学OBOGの組織で、昨年は「東日本大震災支援チャリティーコンサート」を開催するなど、1997年の結成以来、様々な活動を行っています。長年協会活動を応援してくださっている雲南出身の顧楠さん(※詳しく述べ前号「ボランティア通信」をご覧ください)はその中心メンバーであり、初鹿野惠蘭理事長を来賓としてご招待くださいました。

今回のパーティーは、北京大学の他中国の16大学の校友会が協力して実現させました。300人余りの参加者の半数近くは、小さな友好の灯火を決して絶やすまいと集まつた日中の学生でした。国という枠組みを超えて活躍する若者たちが育んだ友情と絆。この若者たちが創る未来は、きっと明るいものになる一ぞんな希望が芽生えた一夜でした。



▲日頃から協会にボランティア協力してくれている日本大学生たちの姿も

◆雲南出身の北京大学OB/OGと(左端が顧楠さん)

雲南省昭通地震 皆様のご支援に感謝申し上げます

9月7日、雲南省昭通市彝良県と貴州省畢節市の境界付近でM5.9の地震が発生しました。10月20日現在、死者81人、負傷者1,012人に達し、被災者は74万人余りに上っています。地震発生直後より会員の皆様からご寄付のお申し出が相次ぎ、協会では緊急支援募金の受け入れを始めました。これまでに寄せられた支援金は40万円余り。お寄せ頂いた善意の募金を被災した小学校や子どもたちのため最も役に立つ形でお渡しできるよう、現在地元政府との協議を進めています。皆様のご支援に心より感謝申し上げます。

なお、昭通市にある協会の支援小学校2校に直接的な被害はなく、全ての児童・教師の無事を確認いたしました。



協会ボランティア通信

連載 第6回

参加できて本当に良かった

立命館アジア太平洋大学
学生サークル「笑Xiao」代表 庄司 智哉さん



庄司くんは頼もしいリーダーシップを發揮する三回生

「この状況で中国に行くことは正直心配もありました。だけど、日中二つの劇団や協会、現地政府の人たちが協力して子どもたちに感動を与えることができた。参加できて本当に良かった」と話すのは、今年9月に行われた児童劇巡回公演にサポート参加してくれた立命館アジア太平洋大学(APU)学生サークル「笑」の庄司智哉代表です。

高校時代は野球をやっていて米国留学の経験もある庄司さん、協会支援校で交流活動を行うため昨年初めて訪れた中国の印象を「見たこともない、想像もつかないような環境で生活していた。日本と外国の違いを僕なりに受け入れられるつもりだったけど全く違った。衝撃でした」と振り返ります。二度目の今回は、公演を興味津々見る子どもたちが「一つ一つの動きに大きなリアクションしてくれて嬉しかった」と新たな感動を覚えたといいます。

庄司さんはボランティア活動について、貧困などの問題は学生には簡単に改善できないことや、活動実績が形に残りにくいことに難しさを感じていたものの、今回の参加で「長期的に見て少しづつでも変えていかなければいい」と気づいたそうです。

日中関係が緊張したこと、自分たちの役割も変わったと感じるそうです。「子どもたちが僕たちと交流することで日本に対するイメージが変わる。僕らには悪意も嫌悪感もありません。僕らも普通に生きてるんだよと伝えたい。そして彼らが大人になったとき、差別、偏見、ネガティブな感情を持たないでほしいなあと思います」

こんなにちはCSR

協会を支えてくださる
協力企業からのメッセージ

第6回 株式会社ビッグメイドミュージック

会社概要 ■原点は江藤雅樹社長が始めた音楽レッスン。次第にCD制作などアウトプットにも力を入れるようになり、2006年に同社を創立。音楽を通じた人づくり、社会貢献を理念に掲げ、メンバーではなく人の心に響く音楽づくりを目指しています。

所在地: 東京都杉並区西荻南2-21-10 TEL/FAX: 03-5941-9996



にこやかに取材に応じてくださいました
佐藤貞治副社長

神戸市東灘区出身の江藤社長は1995年、阪神淡路大地震で被災し、友人十数人を亡くしました。当時、反抗期だった江藤社長は地震後一週間、不眠不休でボランティア活動に参加し、世界観が変わったそうです。その後上京し立ち上げた同社の理念は「人の役に立つこと」。2008年5月、中国四川省で大地震が起きた際も「何か協力できないか」と募金を集め、義捐金を直接被災地に届けられる組織を探したのが当協会との縁の始まり。

昨年の東日本大震災後も、所属アーティストによる復興支援のオムニバスアルバムを制作、売り上げ

の一部を義捐金として当協会に。佐藤貞治副社長は「人の心に火をつけるのが芸術の役割。死にたい

と思っている人に希望を与えるだけでも社会は変わっていく、本気で信じています」と言います。義捐金についても「企業として私腹を肥やそうと思ったことはありません。儲けるよりは人の役に立つために稼がなきやだと思います」

尖閣諸島の領有権などをめぐり揉める日中関係について「音楽は世界中どこでも音楽。言葉があると隔たりができますが、地球が一つの民族という考え方でいいんじゃないですか」佐藤さんは「雲南の小学校ではトイレがないとか水が引けないと聞いたし、同じ日本でも被災地は困っている。かわいそうとは違う意味でできることはないかと思います」と言います。協会については「僕らにできないことをやってくれている。逆に僕らであればできることもある。それをシェアしていけばいいですね」今後もよろしくお願いします。

*CSR=Corporate Social Responsibility(企業の社会的責任): 利益を追求するだけでなく、組織活動が社会へ与える影響に責任をもつこと

**初心忘れず、変わらぬ
草の根の活動を**

TOPICS

2012年
第2回
役員顧問会
開催報告

秋深まる10月下旬、協会東京本部事務局で今年度2回目となる役員顧問会を開催しました。会議では、支援児童劇巡回公演事業をはじめ、グローバルフェス夕出展やチャリティーゴルフコンペなど、夏から秋にかけての協会活動について事務局が報告しました。また、今後も協会設立当初の理念を忘ることなく、今までどおり地道な草の根の支援活動を続けていくことを役員顧問全員で再確認しました。

【10月25日第2回役員顧問会出席者（順不同・敬称略）】

初鹿野蕙蘭、大鷲修平、遠藤功、中村有里子、初鹿野薰（以上理事）、村松健児（監事）、新井淳一、小澤文穂、片岡巖、東郷浩（以上顧問）、山田美葉、張南、滝澤崇（以上事務局）



9月25日に東京都内のホテルで開催された毎年恒例の中国建国記念日祝賀会に、協会の初鹿野蕙蘭理事長が出席しました。

連載 鏡頭裏的世界 レンズの中の世界 No.13

未来への意志

協会支援小学校にて。きれいな中庭を抜けて教室を覗いてみると、山積みのノート。力強い字で書いてあったのが印象的でした。なんだか懐かしい気持ちになったと同時に、僕もちゃんと勉強しないとなーなんて思つたり。

(撮影:庄司智哉 2012年9月協会支援第21校老村小学校)

皆様のご投稿をお待ちしております!



データ: yunnan@jyfa.org
郵送: 〒162-0846 新宿区市谷左内町21-13 1階
日本雲南聯誼協会「レンズの中の世界」係

★25 雲南を彩る星たち

連載第24回
モンゴル族



雲南のモンゴル族は、紀元1253年のフィライ・ハン出征の際、そのまま当地に留まった兵士の子孫といわれています。省内のモンゴル族は約13万人で、主に玉溪市通海県、文山州馬關県、ブーアル市などに暮らしています。言葉や衣装、お祭り、信仰などは北方のモンゴル族とほとんど同じですが、通海県興蒙郷に住むモンゴル族には特別なごちそうがあるそうです。その名も「太極黃鱈」。黄鱈とは田うなぎのこと、「太極黃鱈」は田うなぎを葱や香辛料と一緒に蒸し焼きにした料理。食べたことのある方によれば「まあ、それなりに美味しい」のだとか。草原で馬を駆る遊牧民族が雲南で見つけた、らしからぬ美食一度味わってみたくありませんか？

イベント情報

全国巡回写真展 「笑顔を君に」in近江八幡

日時: 12月8日(土)~23日(日)
場所: 近江八幡図書館(滋賀県近江八幡市)

第12回チャリティ忘年会
「日本と雲南省少数民族友好の夕べ」

日時: 12月22日(土)
場所: 恵比寿ビヤステーション(東京都渋谷区)

初鹿野理事長講演授業(題未定)

日時: 2013年1月16日(水)
場所: 江戸川総合人生大学(東京都江戸川区)

※ は外務省 2012年国民交流友好年公式行事

※10月27日と翌28日に予定されていた「夢は叶う」講演会及び雲南大学学生フォーラム「理想と行動力」、11月23日から予定されていた寒水・能見ダンストゥループ雲南公演は、現在日程を再調整しています

中洲慶子の昆明レポート

雲ひとつない好天が続く秋の昆明。とある屋下がり、「25の小さな夢基金」新入生のプロフィール写真撮影を行ってきました。色とりどりの民族衣装を身にまとう少女たちの笑顔は、昆明の天気に負けないくらいの爽やかさ。担任の李先生いわく、今年の生徒はとにかく元気で、少し変なくらいとのこと。撮影でも「もっと笑いなよ！」なんて野次が飛び、撮られる側も慣れた仕草でポーズを決めます。終始楽しく撮やかな撮影でした。山村から大都市昆明へ出てきたばかりの彼女たちの夢いっぱいの調査書類を見ていると、大学進学のために上京した頃の自分を思い出します。皆様のご支援に支えられ、これから3年で何を学び、どんな未来を切り開くのか。その成長をすぐそばで見守つていけるのが、この仕事の一番の喜びです。

(雲南支部職員)



編集後記

今回の会報で布京小の記事を読んで「えっ?」と思いました。小学校校舎などの建築予算が280万元(約3500万円)とあります。協会は従来、小学校の建築費用を500~600万元としてきましたが、経済発展に伴う物価上昇は、地方にも思わぬ弊害をもたらしているようです。東日本大震災の後、支援校の子供たちも日本のためになしのお小遣いを寄付してくれました。それが彼らにとってどれほど大切なお金だったか、もう一度考えてみようと思います。

2012日中友好交流年公式行事 協会活動写真展 「笑顔を君に」in知立



写真右より、会場「Ciero」オーナー、近藤名古屋支部長、協会中村有里子理事

昨年春から全国を巡回している
協会活動写真展「笑顔を君に」。

7月31日~8月12日には、愛知県知立市のパティオ池鯉鮒(知立市文化会館)で開催されました。会場はなんと、「笑顔を君に」史上初となる喫茶店!飲み物を飲みながらゆっくりと写真を眺める環境は、なかなか好評のようでした。運営を担当してくれた近藤第一名古屋支部長のコメントです。

「写真展は大好評で、芳名帳には40名以上の方の記帳がありました。关心をもって見ていただいた方々の一部です。私が直接接した中にも、熱心に「10周年記念誌」をめくっていらっしゃった方が何人かいました。縁あって、手近なところでの開催になりましたが、実行できて大変有意義でした。」

次の「笑顔を君に」は、12月8日から滋賀県近江八幡図書館で開催です!

恒例、さいたま「国際交流」の秋!

協会大宮支部は、埼玉県で開かれた3つの国際イベントに今年も出展しました。大宮支部の活動は地域の方々にも認知されつつあり、雲南に行ってきた方、トバ文字の勉強をしている方、それに恒例の民族衣装試着を楽しみにしていらっしゃった方など、たくさんの方がブースを訪れてくださいました。来年もまた各イベントに出演予定ですので、まだお越しになったことのない皆さん、どうぞ「国際都市」さいたまへ遊びにいらしてくださいね!

▼▼▼日本雲南聯誼協会大宮支部・秋の出展イベント▼▼▼

- 「国際ふれあいフェア」 10月7日(日) 浦和駅東口駅前広場
- 「あげおワールドフェア2012」 10月8日(祝) 上尾市文化センター
- 「埼玉県国際フェア」 10月13日(土) さいたま新都心駅けやき広場



ボランティア協力(敬称略・順不同)
丸田智代、大野純子、小俣アキ、金子沙樹、松尾エリ、李峰、郭婧、青柳茂樹、川口邦夫、大泉園雄、小川輝夫、佐藤正典、松田雄馬、市川由美子、高橋福子、服部由美子、羽羽清弘、攸萍、寺内明子支部長

平田特命支部長インタビュー! —その7—

特別編 2年間の留学を終えて



肖偉さん

肖偉さんは1956年生まれ。中国全体が激しく躍動した60年代、70年代を経験した世代である。82年に大学を卒業した後、薬品会社の代表取締役を経て、現在は昆明で米国系企業コンサルタント会社と旅行会社の経営者として多忙な毎日をおくっている。5月初旬のことだったと思う。興味深いお話を伺った。78年に文革が終わり中国歌の歌詞が変わったそうで、そのとき肖さんは「中国は発展する」と感じたそうだ。以来30数年、雲南省にも高度経済発展の波が目に見えて押寄せ、昆明の街の変貌は著しい。「中国の国際競争力はまだまだ弱い。雲南省には天然資源が豊富にあるので、日本やアメリカの企業と手を組んで独自のブランドをつくり上げたい」と大きな夢をもっている。さらに、「中国は世界一の経済大国になってほしい」とも言っていた。不自由な時代を経験しただからこそ感じる「豊かさ」の時代感覚が、さらなる「未来」に目を向けさせるのだろう。

肖偉さんは1956年生まれ。中国全体が激しく躍動した60年代、70年代を経験した世代である。82年に大学を卒業した後、薬品会社の代表取締役を経て、現在は昆明で米国系企業コンサルタント会社と旅行会社の経営者として多忙な毎日をおくっている。5月初旬のことだったと思う。興味深いお話を伺った。78年に文革が終わり中国歌の歌詞が変わったそうで、そのとき肖さんは「中国は発展する」と感じたそうだ。以来30数年、雲南省にも高度経済発展の波が目に見えて押寄せ、昆明の街の変貌は著しい。「中国の国際競争力はまだまだ弱い。雲南省には天然資源が豊富にあるので、日本やアメリカの企業と手を組んで独自のブランドをつくり上げたい」と大きな夢をもっている。さらに、「中国は世界一の経済大国になってほしい」とも言っていた。不自由な時代を経験しただからこそ感じる「豊かさ」の時代感覚が、さらなる「未来」に目を向けさせるのだろう。



「夢基金」卒業生とともに



6月末、昆明女子中学春蕾クラスの卒業式典が行われ、相前後して同クラス既卒生の同窓会が昆明市内のホテルで開催された。日本からは「25の小さな夢基金」を通して彼女たちを支援している協会会員の皆さんが出場。卒業式も同窓会も生徒たちの明るい涙と歓声に溢れていた。学び舎を建立起て行く春蕾生徒と大学に進学した元春蕾生徒の泣き顔と笑顔を見るたびに感じる——この子どもたちには「未来」がある、と。

昆明に滞在した2年間に多くの中国人と出会った。そのすべての人々が少なくとも私に対しては反感や偏見をもたない、心優しい人々だった。と同時に、中国と日本の社会事情の違いを実感させられた。願わくば、新しい時代に目を輝かせる中国の若者たちにとって、自由にモノを言うことができ、自由に自分の生き方を選ぶことができる、そんな「未来」であってほしい。